

文学教材の研究

——新美南吉「こんぎつね」（小学校四年）の言語表現——

萩原桂子

九州女子大学人間科学部人間発達学科人間基礎学専攻
北九州市八幡西区自由ヶ丘二一一（〒八〇七―八五八六）
（二〇一三年十一月一日受付、二〇一三年十二月十九日受理）

はじめに

「こんぎつね」は小学校四年の国語科教材として、新美南吉生誕一〇〇年記念を迎えた現在も、脈々と子どもたちの心に届いている。ことばの世界は、「こん狐」から始まったといっても過言ではないほど、日本の子どもたちは「こん狐」を繰り返し読んできたのである。

「こんぎつね」の原作は、南吉が半田第二尋常小学校代用教員時代に「権狐」と題して「スパルタノート」に執筆した一八歳の作品で、ここには一九三二（昭和六）年一〇月四日の日付がある。その後、『赤い鳥』に投稿され、鈴木三重吉が大幅に手をいれて表題も「こん狐」と書き改められ、一九三二（昭和七）年一月号（復刊第三巻第一号）に掲載されたものに、国語科教材「こんぎつね」は拠っている。

本論では、小学校四年国語科の文学教材として「こんぎつね」

を取り上げ、作品の言語表現について論究する。

一 国語科教材としての「こんぎつね」

山本伸二氏は「小・中・高を通じて、国語科の目標として掲げられている「伝え合う力」とは、「学習指導要領 第1章（総則）」でいう「生きる力」を国語科の視点からとらえたものであるが、単に「コミュニケーション能力」のことだけではなく、表現するには、語句・語彙や表現をも含めた広く深い知識と適切な選択能力が必要なのは無論だが、自己の内面を深めまとめる思考力・判断力、資料や先人の知見を読み取る能力、相手の状態や立場等を察知する想像力や感性もなくてはならない」と述べている。国語科教育で求められることは、総合的な言語能力を育てること、だというのである。すべての教科は言語を基盤としており、母語を指導内容とする国語科教材では総合的な言語教育が重要である。

南吉の「ごん狐」は、「語句・語彙や表現をも含めた広く深い知識と適切な選択能力が必要なのは無論だが、自己の内面を深めまとめる思考力・判断力、資料や先人の知見を読み取る能力、相手の状態や立場等を察知する想像力や感性」を養う国語科教材として優れた作品である。

また、宮川健郎氏は「教室の子どもたちを文学学習材の構造がみえる「場所」に立たせてやること、それが授業のなかでも必要だと思う」と述べる。国語科教材としての「ごんぎつね」は、学習者に、作品に何が書かれているかを考えさせるのではなく、作品の構造や表現のあり方を考えさせ、作品がどのように書かれているかをとらえさせるのに適した教材だといえる。国語科教材として「ごんぎつね」について詳しく考察する。

現在、小学校国語の検定教科書は、五種類ある（大阪書籍版、学校図書版、教育出版版、東京書籍版、光村図書版）。「ごんぎつね」はこの五社すべての小学校四年の教科書に採用されている。しかも、五社そろって「ごんぎつね」が採用されたのは、一九八〇年度版からで、四半世紀以上にわたって日本全国の小学校四年の教材として使用されてきたのである。一九三二（昭和七）年『赤い鳥』に発表された「ごん狐」が、初めて教科書に登場したのは、一九五六（昭和三一）年の大日本図書版である。鶴田清司氏は「ごんぎつね」の価値や魅力が広く共有されるとともに、教科書教材として完全に定着したといえるだろう。これほど息が

長く、しかも広範に採用されてきた教科書教材は「ごんぎつね」を置いて他にはない」と指摘している。

南吉の「ごん狐」は、国語科教材となったことで「教室で読んだ子どもたちの数は、六〇〇〇万人をはるかに超えるといわれる」⁴という国民的童話となった。教材研究もかなりの数にのぼっていることになる。そのなかから、佐藤公治氏は子どもたちに「2つの読解の基本タイプ」が生まれたと指摘する。⁵

「ごん」の行為の動機、あるいは目的に関わることとして、「ごん」は自分のしたいたずらのつぐないのために兵十にものを運び続けているという読みと、「ごん」は兵十と友だちになりたい（兵十に共感し、近づきたい）という目的のために行っていたのだという読みの2つであった。

国語科教材として「ごんぎつね」を取りあげるには、「ごん」の兵十に対する思いが「つぐない」から愛情へ変容していく作品構造がみえる場所に学習者を立たせることが重要である。そのために、場面ごとに「ごん」の兵十への思いに寄り添って読み進めていく。

ごんは、ひとりぼっちの小ぎつねで、しだのいっばいしげつた森の中に、あなをぼって住んでいました。そして、夜でも

昼でも、辺りの村へ出てきて、いたずらばかりしました。(一)

ここでは、「くん」が「ひとりぼっちの小ぎつね」であり、「村へ出てきて、いたずらばかりしました」ということがわかる。「くん」は、「小ぎつね」であり親のある「子ぎつね」ではないことが重要である。つまり、「くん」はひとりでさびしさを紛らわすために「いたずら」をする様子がかかるのである。

「ははん、死んだのは、兵十のおつかあだ。」ごんは、そう思いながら頭を引っこめました。

そのばん、ごんは、あなの中で考えました。「兵十のおつかあは、どこについていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで、兵十が、はりきりあみを持ち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎを取ってきてしまった。だから、兵十は、おつかあにうなぎを食べさせることができなかつた。そのまま、おつかあは、死んじゃったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいと思ひながら死んだんだろう。ちよつ、あんないたずらをしなけりゃよかつた。」(二)

ここでは、「死んだのは、兵十のおつかあだ。」ということがわかり、「くん」は「ちよつ、あんないたずらをしなけりゃよかつた。」

た。」と自分のいたずらを反省し後悔するのである。

「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」(三)

「くん」は、「ひとりぼっち」になった兵十に同情するようになる。反省と後悔と同情は順を追って「くん」を襲った感情であり、この感情の連鎖が「くん」にコミュニケーションの方法をもたない異類の人間への接近を図らせるのである。共通の言語を持たない兵十に「くん」はどのように自分の気持を伝えるのか。最初に「くん」の取った行動は、盗んだいわしを兵十にやることだった。

いわし売りは、いわしのかごを積んだ車を道ばたに置いて、びかびか光るいわしを両手でつかんで、弥助のうちの中から持って入りました。ごんは、そのすき間に、かごの中から五、六びきのいわしをつかみ出して、もと来た方へかけだしました。そして、兵十のうちのうら口から、うちの中へい、わしを投げこんで、あなへ向かつてかけもどりました。(三)

そして、「うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをした」と思うのである。ここでは、あくまで自分の犯した過ちに対する「つぐない」という気持が中心で、「兵十のうちのうら口から、う

ちの中へいわしを投げこんで、あなへ向かつてかけもどりました。「というくらいで、自分の「つぐない」の行為に満足している。しかし、次の日、「ごん」は昨日の行為が裏目に出たことを知ることになる。

うら口からのぞいてみますと、兵十は、昼飯を食べかけて、茶わんを持ったまま、ぼんやりと考えこんでいました。変なことには、兵十のほっぺたに、かすりきずがついています。どうしたんだらうと、ごんが思っていますと、兵十がひとり言を言いました。

「いったい、だれが、いわしなんかを、おれのうちへ放りこんでいったんだらう。おかげでおれは、ぬすびと思われて、いわし屋のやつにひどいめにあわされた。」と、ぶつぶつ言っています。(三)

最初のうなぎのいたずらは、兵十の母親の葬式で知ることになったのが、今回のいわしの失敗は、兵十のつぶやきを盗み聞きすることです。「ごん」の知るところとなる。異類である人間への「ごん」の観察は、目からの情報だけではなく、耳からの情報、すなわち兵十のことばが理解できるところまで接近しているのである。そして、「つぐない」の行為にも変化がみられる。

ごんは、これはしまったと思いました。「かわいそうに兵十は、いわし屋にぶんなぐられて、あんなきずまでつけられたのか。」

ごんはこう思いながら、そつと物置の方へ回って、その入り口にくりを置いて帰りました。(三)

いわしは投げこまれたが、くりは入り口に置いて帰るのである。「ごん」の兵十への「つぐない」の気持は「次の日も、その次の日も、ごんは、くりを拾っては兵十のうちへ持ってきてやりました。その次の日には、くりばかりでなく、松たけも二、三本、持っていきました。」(三)というように、繰り返し行為となって表されるのである。ある晩、「ごん」は、自分の「つぐない」の行為に対する兵十のことばを聞いてしまうのである。

「おれあ、このごろ、とても不思議なことがあるんだ。」
「何が。」

「おつかあが死んでからは、だれだか知らんが、おれにくりや松たけなんかを、毎日毎日くれるんだよ。」

「ふうん、だれが。」
「それが分からんのだよ。おれの知らんうちに置いていくんだ。」

ごんは、二人の後をつけていきました。(四)

今までは単なる「つぐない」の気持から無償の行為として兵十にくりや松たけを運んでいた。「ごん」は、兵十が自分の存在に気が付いていないことに物足りなさを感じ始めるのである。「ごん」は、兵十が自分のことをどう思っているかが知りたくなるのである。

「ごん」の兵十への思いが、「つぐない」から愛情へと変容する大事な場面である。

おしろの前まで来たとき、加助が言いました。

「さっきの話は、きつと、そりゃあ、神様のしわざだぞ。」

「えつ。」

と、兵十はびつくりして、加助の顔を見ました。

「おれはあれからずっと考えていたが、どうも、そりゃ、人間じゃない、神様だ。神様が、おまえがたった一人になったのをあわれに思わっしやって、いろんな物をめぐんでくださるんだよ。」

「そうかなあ。」

「そうだと。だから、毎日、神様にお礼を言うがいいよ。」

「うん。」

ごんは、「へえ、こいつはつまらないな。」と思いました。(五)

見返りを求めない「つぐない」の行為であったものが、自分の存在に気づいて欲しいという愛情の行為に変わり始めたことが、「ごん」の悲劇の結末を招くことになる。自分が兵十に対して抱いている愛情と同じくらい兵十の自分への愛情を求めたことから、「ごん」の苦悩は始まる。

「おれがくりや松たけを持って行ってやるのに、そのおれにはお礼を言わないで、神様にお礼を言うんじゃあ、おれは引き合わないなあ。」(五)

報われない行為であると知りながらも、「ごん」は兵十に自分の気持を伝えたいというかなわぬ愛情を断ち切ることができない。ここには、童話というかたちのなかで切ない愛の本質が描きだされている。

その明るる日も、ごんは、くりを持って、兵十のうちへ出かけました。兵十は、物置でなわをなっていました。それで、ごんは、うちのうら口から、こっそり中へ入りました。

そのとき兵十は、ふと顔を上げました。と、きつねがうちの中へ入ったではありませんか。こないだ、うなぎをぬすみやがったあのごんぎつねめが、またいたずらをしに来たな。

「ようし。」

兵十は立ち上がって、なやにかけてある火なわじゅうを取って、火葉をつめました。そして、足音をしのばせて近よって、今、戸口を出ようとするごんを、ドンとうちました。(六)

「ごん」の行為は、「つぐない」か愛情かの二者選択にあるのではなく、「つぐない」から愛情へと変化せざるを得なかった隔たつたものへの悲哀に満ちた愛のかたちではなかったか。

うちの中を見ると、土間にくりが固めて置いてあるのが、目につきました。

「おや。」

と、兵十はびっくりして、ごんに目を落としました。

「ごん、おまいだったのか、いつも、くりをくれたのは。」

ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。

兵十は、火なわじゅうをばたりと取り落としました。青いけむりが、まだつつ口から細く出ていました。(六)

「ごん」の行為の意味を、「ごん」の心の葛藤を小学校四年の児童が理解できるのかどうかは別として、「ごん」の行動の変化は作品から読み取ることにはできる。人間のことを持たない「ごん」が、自分の気持を兵十に伝えるには形のあるものを贈る行為

しかない。しかし、その行為は銃で撃たれるかもしれないという危険をともしないものでもあった。「土間にくりが固めて置いてある」という描写には、「ごん」のなんとか兵十に自分の存在を知ってほしいといういじらしいほどの愛のメッセージが込められていることが理解できる。

つぎに、国語科教材「ごんぎつね」のテキストについて、草稿「権狐」と定稿「ごん狐」、さらに教科書「ごんぎつね」について考察する。

二 草稿「権狐」と定稿「ごん狐」

草稿「権狐」は、一九三二（昭和六）年県立半田中学校を卒業し、母校である半田第二尋常小学校代用教員時代（同年四月から八月まで）に「スパルタノート」といわれる自家製ノートに執筆され、同年一〇月四日に脱稿したものである。南吉が、『赤い鳥』に投稿したものが、一九三二（昭和七）年一月号に「ごん狐」として掲載された。表題「権狐」から「ごん狐」への変更をはじめとして、鈴木三重吉による大幅な修正がみられる。

安藤重和氏は、「南吉自身の「なま原稿」と『赤い鳥』誌上に掲載された作品を見比べると、鈴木三重吉は作品の表記のみではなく様々な点についても、南吉の原稿に加筆訂正を加えていることが知られ、興味深い。いま、「権狐」の成立について考える

にあたり、私は、さしあたり、南吉の「なま原稿」成立に至るまでの段階について考察を加え⁶てみる⁷として「権狐」という作品の中には、一般の人の知らない実地に則した知識が背景にあると思われる描写が散見される⁷ことを指摘している。

また、木村功氏は「一口承にすぎなかつた原「権狐」は、鈴木三重吉を通して「ごん狐」へと変換されることで、「国語」の標準を保持し続ける文芸システムとして機能するよう、近代文学テキスト群に位置づけ直された⁸と指摘している。南吉の「権狐」は鈴木三重吉の手入れによって、「一般の知らない実地に則した知識」を越えて、全国に流通する「ごん狐」に生まれ変わったことは確かである。

鶴田清司氏は、語句や方言や表記の細かい修正を除いた、草稿「権狐」と定稿「ごん狐」における異同について①冒頭部の違い、②ごんの呼称、③描写や説明の削除、④撃たれたあとのごんの描写の四点に注目して考察している⁹。

草稿「権狐」の冒頭部分は、次のように書かれていた¹⁰。

茂助と云ふお爺さんが、私達の小さかつた時、村にゐました。「茂助爺」と私達は呼んでゐました。茂助爺は、年とつてゐて、仕事が出来ないから子守ばかりしてゐました。若衆倉の前の日溜で、私達はよく茂助爺と遊びました。

私はもう茂助爺の顔を覚えてゐません。唯、茂助爺が、夏

み、かんの皮をむく時の手の大きかつた事だけは覚えてゐます。茂助爺は、若い時、猟師だつたさうです。私が、次にお話するのは、私が小さかつた時、若衆倉の前で、茂助爺から聞いた話なんです。(一)

この部分は、定稿「ごん狐」では大幅に削除され、「これは、私が小さいときに、村の茂平というおじいさんから聞いたお話です。」と簡潔な表現になつてゐる。木村功氏は、三重吉の「茂助爺」の削除に「地方性・社会性を物語上から消去して行く姿勢は、地域言語に対する三重吉の姿勢と通底する¹¹」ことを指摘し、つぎのように述べてゐる¹²。

「国語」表現の近代化の理念に突き動かされて、物語の構成言語や内容上の地方性・社会性を当局の統制の下に平均化していく時代の動向の中に、三重吉もまぎれもなくいたといえるであらう。

地方性・社会性の濃かつた南吉の「権狐」は、三重吉によつて口承者の地方や職業を消去されたことで、近代的な物語に書き換えられたのである。

つぎに、草稿では一貫して「権狐」と呼ばれていたが、定稿では、最初「ごん狐」と紹介された後は、すべて「ごん」と書かれ

ている。「ごん」の呼称の修正には、語り手が「ごん」に愛情を抱きながら、「ごん」の気持に寄り添うように物語が進行することで、読者も狐である「ごん」に同化しやすく、作品世界に感情移入しやすいという利点がある。

さらに、草稿「権狐」第三段落の最後にあつた「そして権狐は、もう悪戯をしなくなりました。」の三重吉による削除については、安藤重和氏がこの一文によって「第一段落以降の話の流れがここで一件落着したことを示し、第三段落から第四段落へ話の流れを断ち切ってしまうが故に、鈴木三重吉が「赤い鳥」にこの作品を掲載する際に削除したのだと思う。この削除によってこの作品の完成度は高められたと思われる¹³と述べている。こうした三重吉の改稿は、「ごん」が撃たれた最後の場面においても見事な効果を発揮するのである。

草稿「権狐」では、「権狐は、ぐつたりなつたまゝ、うれしくなりました。兵十は、火縄銃をばつたり落しました。」とあつたところを、「ごん狐」では「ごんは、ぐつたりと目をつぶつたまゝ、うなずきました。兵十は、火縄銃をばつたりと、とり落しました。」と書き改められた。「ごん」の気持を直接「うれしく」とは書かず余韻を響かせることで、この場面の読者への印象は一層強くなっている。

これらの点からみても、草稿「権狐」は、『赤い鳥』掲載時における三重吉の手入れによって新たな魅力を増したといえる。これ

らの修正は、雑誌『赤い鳥』を創刊し、児童文学に精通した五〇歳の三重吉が、新人である一八歳の青年に示した心のこもった指導であつたと考える。「ごん狐」は、児童文学の重鎮三重吉と新進気鋭の南吉のコラボレーションともいえる。

定稿「ごん狐」は、国語科教材「ごんぎつね」となつて教師と学習者の間でより深い読みを生成している。第六段落の「ごん」が兵十に銃で撃たれる場面は、教材・教師・学習者が一体となつてクライマックスに到達することができる。

ごんは、ばつたりとたおれました。

兵十はかけよつてきました。(一六)

興奮や緊張が最も高まる場面で、学習者に疑問が浮びあがる。この場面は兵十に視点があるので、「兵十はかけよつていききました。」ではないかというのである。「かけよつてきました。」と「かけよつていきました。」の違いについて、鶴田清司氏はつぎのように述べている¹⁴。

たしかにこの場面では、「ごんはく、兵十はく」と間髪を入れずにたたみかけることによって緊張感を高める方法が使われている。

学習者が、「こんぎつね」の作品世界に深く入り込み、「こん」を含めた登場人物の視点を精緻に読み進めていくことから生じた疑問で、学習者に作品の構造や表現のあり方を考えさせ、作品がどのように書かれているかをとらえさせるといふ点においても、教師の圧倒的な支持をうける教材であることがわかる¹⁵。

三 「こんぎつね」の言語表現について

「こんぎつね」の指導書には「こんや兵十の気持ちに迫ることが、大切な学習活動であることはまちがいない。そのことを踏まえた上で物語の全体像をとらえるべく、どのように発問したり指示したりするかが本単元の指導で大切になる」¹⁶とある。「こんぎつね」の言語表現を中心に「こん」の気持ちに触れる読み方を考察する。

空はからつと晴れていて、もずの声がキンキンひびいていました。(一)

第一段落では「キンキン」というオノマトペに象徴されるように、「夜でも昼でも、辺りの村へ出てきて、いたずらばかり」していた「こん」が、「二、三日雨がふり続いたその間」外にも出られず一人で「あなの中にしゃがんで」いた苦痛から解放された

様子が活き活きと描かれている。

はちまきをした顔の横つちように、円いはぎの葉がまい、大きなほころみたいにへばり付いていました。(一)

ここでは、「三日もの雨で」、「ただのときは水につかることのない、川べりのすすきはぎのかぶが、黄色くにごった水に横たおしになって」いたため、水にひたりながら作業する兵十の一生懸命な様子が目に映るようである。

ごんは、びくの中の魚をつかみ出しては、はりきりあみのかかっている所より下手の川の中を目がけて、ぼんぼん投げこみました。どの魚も、トボンと音を立てながら、にごった水の中へもぐりこみました。

いちばんしまいに、太いうなぎをつかみにかかりました。が、なにしろぬるぬるとすべりぬけるので、手ではつかめません。ごんは、じれったくなって、頭をびくの中につっこんで、うなぎの頭を口にくわえました。うなぎは、キュッといて、ごんの首へまき付きました。(二)

「こん」のいたずらの本領発揮という部分で、真に迫った表現になっている。兵十に見つかった「こん」は、「そのまま横つ飛

びに飛び出して、一生けんめいににげていきました。」という表現には、「ごん」のあわてぶりに躍動感があつて思わず引き込まれる。第一段落は終始「ごん」の元気な様子がテンポよく表現されている。

第二段落では、雨上りの青天から一転して、秋の彼岸頃咲く「ひがん花」が「墓地」との連想のなかで兵十のおつかあの葬式を「ごん」に知らせるのである。

墓地には、ひがん花が、赤いきれのようにさき続いています。たと、村の方から、カーン、カーンと、かねが鳴ってききました。そうしきの出る合図です。(二)

兵十の表情は「いつもは、赤いさつまいもみたいな元気のいい顔が、今日はなんだかしおれていました。」というように、ここでは、まだ「ごん」は人間のことを聴き取るのではなく、あくまで視覚によつて状況を理解しようとしている。

第三段落では、「うなぎのつぐない」に盗んだいわしを兵十の家扔到こんだことが原因で、兵十が「いわし屋にぶんなぐられて、あんなきずまでつけられた」ことを、やはり視覚から認識するのである。

第四段落にいたつて、「ごん」は視覚ではなく、聴覚から人間のことを理解するようになる。人語が解せるようになったの

は、「ごん」が兵十の自分の行為に対する気持を知りたいと思つたからである。

第五段落では、「ごん」の健気な行動が描きだされる。

ごんは、お念仏がすむまで、いどのそばにしゃがんでいました。兵十と加助は、またいつしよに帰っていきます。ごんは、二人の話を聞こうと思つて、ついていきました。兵十のかげぼうしをふみふみ行きました。(五)

「兵十のかげぼうしをふみふみ行きました。」には、「ごん」の切ないまでの兵十への思いが表現されている。近づきたい、でも近づけないという「ごん」のじれつたい気持が現実的に描写されている。「いたずら」をするときは元気な「ごん」であったが、気になる相手の気持を知るには臆病な「ごん」である。南吉は「権狐」を書く二年前、一九二九（昭和四）年四月六日の日記に次のように書いている¹⁷。

やはり、ストーリーには、悲哀がなくてはならない。悲哀は愛にかわる。けれどその愛は、芸術に関係があるかどうか。よし関係はなくてもよい、俺は、悲哀、即ち愛を含めるストーリーをかこう。

一五歳の南吉は「悲哀は愛にかわる」と固く信じていた。当時の南吉にとって「こん」の兵十への愛は、自身の死によってしか実現されないほど切実なものであったのである。

おわりに

「こん」と兵十という異類間でコミュニケーションは、ことばが介在しなかったために悲劇におわった。二者の間に共通のことばがあれば、「こん」は兵十に撃たれることはなかったかもしれない。伝え合うことの難しさを童話に託した南吉とは、どのような人物だったのだろうか。

南吉は、一九二二(大正二)年七月三〇日、半田町字東山八六番地(現・愛知県半田市岩滑中町一丁目八三番地)に父渡辺多蔵、母りゑの二男として生れた。生後一八日で夭折した長男の名を受け継ぎ、「正八」と名づけられた。家は畳屋を営んでいた。南吉が四歳の一九一七(大正六)年一月四日母りゑが二九歳で病没する。翌年二月継母志んが入籍し、弟益吉が生まれる。

一九二二(大正九)年四月半田第二尋常小学校(現・岩滑小学校)へ入学し、翌年七月半田町平井の新美志も(実母りゑの継母)の養子となるが、数ヶ月で実家にもどる。一九二六(昭和元)年四月県立半田中学校(現・愛知県立半田高等学校)に入学する。このころから文学に興味をもち、同人誌などに投稿する。

一九二八(昭和三)年九月、月刊投稿雑誌「緑草」に新美弥那鬼のペンネームで童話「銭坊」が、翌年一月「兔の耳」に童謡「ついつちよ」が掲載される。

一九二九(昭和四)年五月童話「少佐と支那人の話」(のちの「張紅倫」)を書く。一九三二(昭和六)年三月半田中学校を卒業、岡崎師範学校を受験するが身体検査で不合格となり、四月母校の半田第二尋常小学校の代用教員になり八月まで勤める。そのかわら復刊した『赤い鳥』に投稿し、「正坊とクロ」(八月号)、「張紅倫」(十一月号)が掲載される。同年九月北原白秋門下による『チチノキ』へ加入、同年十二月東京高師受験に失敗するが、この上京で巽聖歌、与田準一を知ることになる。

一九三二(昭和七)年四月東京外語学校英語部に入学し、巽聖歌宅に寄寓する。『赤い鳥』に「こん狐」(一月号)、「のら犬」(五月号)が掲載される。同年九月より外語の寮に同年十一月、北原白秋、鈴木三重吉に会う。一九三四(昭和九)年二月第一回目の喀血にともない一時帰郷する。一九三六(昭和一一)年三月東京外語を卒業するが中等教員免許状が取得できず、雑貨貿易商に勤務する。同年一〇月第二回目の喀血で帰郷、翌年四月河和第一尋常高等小学校代用教員として七月まで勤める。同年九月鳥根山畜禽研究所杉治商会に勤務する。

一九三八(昭和一三)年四月県立安城高等女学校教諭心得となる。一九三九(昭和一四)年五月江口榛一の斡旋で『哈爾賓日日

新聞』に「最後の胡弓弾き」(五月)、「久助君の話」(一〇月)、「花を埋める」(一〇月)を寄稿する。一九四〇(昭和一五)年小説「銭」が『婦女界』(一二月号)に、生活童話「川」が『新児童文化』創刊号に掲載され、ようやく世に注目される。翌年「嘘」を『新児童文化』(六月)、「うた時計」を『こくみん三年生』(一月)へ掲載し、一〇月単行本『良寛物語 手毬と鉢の子』(学研)が出版され、一一月評論「童話における物語性の喪失」を『早稲田大学新聞』に発表する。

一九四二(昭和一七)年一月血尿、腎臓結核による死を覚悟し、勤務のかたわら「ごんぎつね」¹⁷、「おぢいさんのランプ」、「牛をつないだ樅の木」¹⁸、「草」¹⁹、「花のき村と盗人たち」²⁰、「百姓の足、坊さんの足」²¹、「和太郎さんと牛」²²、「鳥右エ門諸国をめぐる」といった南吉童話の代表作が一気に書かれる。同年一〇月第一童話集『おぢいさんのランプ』(有光社)を棟方志功の挿絵で刊行する。翌年一月最後の力をふりしぼって「狐」²³、「かぶと虫」²⁴、「疣」²⁵を書く。「天狗」は未完、絶筆となる。一九四三(昭和一八)年三月二二日咽頭結核により二九歳で永眠、四月一八日自宅で葬儀が行われた。法名は、釈文成である。同年九月『牛をつないだ樅の木』(大和書店)、同年一〇月『花のき村と盗人たち』(帝国教育会出版部)が刊行された。

亡くなる二日前三月二〇日、半田尋常小学校時代の恩師である伊藤仲治の妻照の見舞いに対して「まだまだ、仕事があるのに残

念だ。もう起きられなくなってしまう。私は池に向って小石を投げた。水の波紋が大きく広がったのを見てから死にたかったのに、それを見届けずに死ぬのがとても残念だ」と訴え、「自分の寿命が短くて……波紋が小さ過ぎるのが残念だ、くやしい……」と何度も繰り返したという¹⁸。

最後の最後まで生きること、人と関わることをあきらめなかった南吉のことは、「ごん狐」の最後の「うなずき」のような悲哀がこもっている。南吉の絶筆となった未完成作品「天狗」(昭和一八年一月一八日)の冒頭には、「つつましい絵の中に、半分の現実をつきまぜるのです」と書かれ、「私は、蛍を見ると、自分の絵に似ていると思います。蛍をとりまく闇黒を現実にとえるならば、蛍が、それをたよりにして生きている、あのかすかな青い火は、蛍の夢でなくて何でしょう。世の中に蛍に心をひかれる人があるうちは、私のようなものの描いた絵も、誰かに、静かに愛されてゆくだろうと思うのです」と語っている¹⁹。南吉の「ごん狐」は、現在大きな波紋となつて、国語科教材「ごんぎつね」としては勿論、教室を離れた多くの老若男女の人々に感動を与え続けている。

*新美南吉「ごんぎつね」の本文は、『国語 四下 はばたき』(光村図書)に拠つた。南吉に関しては、『校定新美南吉全集』(大日本図書)、『生誕百年新美南吉』(新美南吉記念館)を参考にした。

註

- 1 山本伸二「第二章 国語科教育の意義と目標」大柳勇治・堀江忠道・山本伸二編『国語科指導法の実践と資料』双文社出版、二〇一一年三月、二五頁。「小学校学習指導要領」（平成二〇年三月告示）では「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高める」とともに、思考力や想像力を養い言語感覚を養い、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる」となっている。
- 2 宮川健郎氏は「子どもたちを文学教材の構造が見える「場所」に立たせようとする授業は、学習材化された作品の表現や構造について考える授業になり、作品の主題を追求する授業とは一線を画する」と指摘する。「Ⅲ 読むこと」伊藤隆司・中村哲也・宮川健郎『新しい小学国語の創造―話す、聞く、書く、読む』双文社出版、二〇〇四年二月、一四三頁。
- 3 鶴田清司「第1章 国民的な童話になった『こんぎつね』」『なぜ日本人は『こんぎつね』に惹かれるのか』星雲社、二〇〇五年一月、三〇・三二頁。
- 4 『別冊太陽 生誕一〇〇年記念 新美南吉』平凡社、二〇一三年八月、扉頁。
- 5 佐藤公治「5章 子どもたちは文学教材をどのように読み進めているか―文学教材『こんぎつね』の読解過程―」『認知心理学からみた読みの世界―対話と協同的学習をめざして―』北大路書房、一九九六年一〇月、一五四頁。
- 6 安藤重和「権狐」成立試論『愛知教育大学研究報告』37（人文科学編）一九八八年二月、一七二頁。
- 7 安藤重和 同掲書、一六八・一六九頁。
- 8 木村功氏は「近代社会が出版文化の成熟とともに消去していった声の文化の歴史、口承の歴史の残滓を改めて拭い去る行為であったことは、三重吉の『赤い鳥』編集者としての意識とは別に働いていた、出版資本主義の趨勢の帰結するところであったろう。すでに一九〇四年には共通語が東京中流社会の言語であると規定されていた（『尋常小学校読本編纂趣意書』）ように、全国誌にふさわしい共通性・普遍性を常にその誌面に獲得・保持し続けることであり、それは同時に『赤い鳥』も大きく寄与するところであった綴方教育を通じて創出された夥しい児童読者層・新しい小国民の創出と保持にも密接に関わっている」と指摘する。「第4章 新美南吉「権狐」論」『賢治・南吉・戦争児童文学―教科書教材を読みなおす―』和泉選書Ⅶ、二〇一二年二月、一〇二頁。
- 9 鶴田清司「第4章 『こんぎつね』に隠された秘密」前掲書、一七二・一七七頁。
- 10 『校定新美南吉全集第十巻』大日本図書、一九八二年二月、六四九頁。

- 11 木村功 前掲書、九五頁。
- 12 木村功 前掲書、九六頁。
- 13 安藤重和 前掲書、一六六・一六七頁。
- 14 鶴田清司 前掲書、一九〇頁。
- 15 鶴田清司氏は「ごんぎつね」が教科書教材として長い歴史を持ち、多くの授業実践がなされてきたのは、作品に対する教師たちの熱烈な支持があったからである」と指摘している。前掲書、一五〇頁。
- 16 『小学校国語 指導事例集4年—23版対応実践記録—』光村図書、二〇一一年二月、一四六頁。
- 17 『校定新美南吉全集第十卷』前掲書、一〇六頁。
- 18 大石源三『新美南吉の生涯 ごんぎつねのふるさと』エフエー出版、一九八七年一月、一五九・一六〇頁。
- 19 『校定新美南吉全集第六卷』大日本図書、一九八〇年一月、三三八・三三九頁。

A study of Japanese language art education
—Verbal expression of “GONGITSUNE”
by Nankichi NIIMI—

Keiko OGIHARA

Course of Principal Human Sciences, Department of Human
Development, Faculty of Humanities, Kyushu Women's
University 1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyusyu-shi
807-8586, Japan

No English abstract